

# なごやかたゆうぜん 名古屋型友禅

幽玄さを秘めた色遣い

わたなべ よしはる  
渡邊 芳治

二代目美彦さんが、戦災にあった工場を昭和23年に再建。

三代目を引き継ぎ、昔の面影を残す工場  
で名古屋型友禅に情熱を傾けている。



## 友禅染めとは

友禅染めは着物などを染める技法のひとつです。京都から加賀藩の城下町である金沢に持ち込まれ、その後、江戸や名古屋へと広まってきました。

## 名古屋友禅の特色

京や加賀の友禅と比べて色数を抑えており、全体的に渋めの落ち着いた色合いであることが特色です。

徳川宗春むねはるが尾張藩主であった1730年頃、この地に豪華絢爛な友禅染めが伝わりましたが、尾張藩の財政悪化で宗春むねはるが失脚したことに伴い、模様はんらんの配色が抑えられるようになったといわれています。

名古屋友禅は、京友禅、加賀友禅、東京手描友禅と並び、国から伝統的工芸品に指定されています。



## 型友禪の発祥と染め方

名古屋友禪は、「手描友禪」と「型友禪」に大別されます。

型友禪の技術は江戸時代に発祥し、化学染料を混ぜた色糊いろのりと型紙を用いた染めの技法として確立されたのは明治時代といわれています。

友禪模様を型彫りした型紙を下絵の代わりに用い、使う色ごとに型紙を変えて絵柄をつけます。着物によっては複数枚の型紙を使用する必要があり、場所ごとに柄が異なる振袖ふりそでになると、1反を染めるのに多いもので800～900枚の型紙を使うこともあります。



型友禪で  
使われる型紙

## 作業工程

- ① 糊のりをひいた友禪板に白い生地を貼り付ける。
- ② 柄の輪郭の部分に糊のりを置いていく。
- ③ 色を調合し、型紙を用いて丸刷毛まるはけで「絵付け」をする。  
友禪ならではのぼかし(色の濃淡をつけること)も施していく。
- ④ 生地の色を染める「地染めじぞめ」をする。  
その際、模様の部分に色が入るのを防ぐため、  
「伏糊ふせのり」をする。
- ⑤ 生地を蒸して染料を定着させ、水洗いで  
余分な染料や糊のりを落として仕上げる。



# 職人さんに聞きました！

**Q** 作品を作るうえで、大変なことはなんですか？

**A** すべての工程が大変です。例えば、友禅板に白い生地を貼り付ける作業ひとつをとっても、まっすぐに貼らないと作業の途中で図柄がずれてきてしまいます。また、型紙は含まれる水分の量によって伸び縮みします。1日水につけたうえで水気をとり、湿った状態を保たないと図柄が合わなくなってしまうので、型紙の状態に気を配らないといけません。色を決める色合わせ作業も、思い通りの色味を出すために配合や水分量に気を付けなければならず、簡単そうに見えて大変です。



**Q** 伝統の技を受け継ぐうえで大切だと思うことはなんですか？

**A** 名古屋型友禅を後世に伝えていくために、型紙や刷毛などの道具は欠かせません。しかし、それらの道具を作る職人は徐々に少なくなってきています。こうした職人を守るためにも、まずは名古屋型友禅のことを1人でも多くの人に知ってもらいたいと思っています。

渡邊さんは、名古屋型友禅の技法を生かした作品作りも行っています。和紙やエコバッグに着物の図柄を型染めするなど、時代に合わせた型友禅の技法の活用法を模索し続けています。



# 名古屋型友禅と黒川

北区と名古屋型友禅の関わりは、渡邊さんの工場のすぐ近くを流れる黒川にあります。

反物についた余分な染料や糊のりを洗い流す作業には、きれいな水が大量に必要でした。

かつて黒川の横を流れていた御用水ごようすいには清流が流れていたために、市内に点在していた染色工場が集まってきたといわれています。

最盛期には黒川や御用水ごようすい沿いだけでも数十軒くらいの工場があり、活気にあふれていたといえます。



▲ 御用水ごようすいで糊のり落としを行う様子

## 黒川友禅流し

昔ながらの名古屋型友禅のりの糊落としを再現する催しで、例年3月下旬～4月上旬に開催されています。

会場となる辻栄橋つじさかえし

付近では、満開の桜が咲き誇り、友禅の美しさを際立たせています。

